日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集
編集人　辻裕史
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
８階（〒100-0011）
電話（03）3503-3829
FAX（03）3503-3828
http://www.conpt.jp

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.37　No.4
2013.7.1
会報（通巻 220 号）

日本新聞製作技術懇話会
会　報（隔月刊）
（禁転載）

CONPT-TOUR 2013の見所

日本新聞協会　技術コンサルタント
三宅　順

今年のCONPT-TOURは10月6日（日）～12日（土）の7日間の予定で、独ベルリンで開催されるWorld Publishing Expo 2013（IFRA-Expo & Conference）の見学を中心に、独と英を代表する新聞社2社とデジタル印刷工場2社を視察する予定だ。なお、英国の訪問希望先の新聞社については（7月初め）現在も交渉中だ。

＜World Publishing Expo 2013＞

World Publishing Expoは毎年ヨーロッパの都市でWAN-IFRA（世界新聞・ニュース発行者協会）が開催する新聞製作関係者のための世界的な総合機材展だ。例年、日本のJANPSの数倍の規模で開催されている。今年は10月7日（月）～9日（水）までの3日間、独ベルリンのメッセ・ベルリンで開催される。来場者は世界80か国以上から約8500人が訪れるものと見込まれている。この機材展は

目次

CONPT-TOUR2013の見どころ　日本新聞協会　技術コンサルタント　三宅　順 …… 2
CHINA PRINT2013視察記　㈲メディアテクノス　代表取締役　井上　秋男 …… 4
新局長に就任して　京都新聞印刷　取締役印刷局長　杉本　英和 …… 7
日本経済新聞社　製作局長　宮本　寿昭 …… 8
福島民報社　印刷局長　宍戸　篤 …… 9
山形新聞社　システム局長　松田　隆仁 …… 10
楽事万歳　デーリー東北新聞社　編集局次長兼印刷部長兼技術部長　竹ノ子　昭二 …… 11
会員社リポート　ボッシュレックスロス㈱、日本アイ・ビー・エム㈱ …… 12
椿本興業㈱、NECエンジニアリング㈱ …… 13
第39回定時総会開く …… 14
CONPT日誌他 …… 14

●表紙写真提供：「CONPT TOUR2012　入選作より」
日本経済新聞社・加藤　謙一氏
「アーヘンの駅舎」
●表紙製版：㈱デイリースポーツプレスセンター
●組版・印刷：㈱デイリースポーツプレスセンター

JANPSと違い、機材の商談の場と位置づけられているため、来場者の9割以上が新聞社や印刷工場の幹部、意思決定者達だ。

今年の見どころは、昨年のExpoやdrupaの展示内容および最近の技術情報から類推すると、電子メディア部門では多様なモバイル端末への情報発信のためのハード・ソフトを含む進化したプラットホームの展示、従来の新聞印刷部門ではコスト削減、印刷品質管理、新たな収益部門への取り組み(デジタル印刷)、環境問題対策など、300社以上のメーカーやサプライヤーから多彩なテーマに基づく新技術の提案がありそうだ。また、同期間に関係者共通のテーマによる会議も開催される。

＜訪問予定の新聞社2社＞

独では同国を代表するアクセル・シュプリンガー本社、英ではニューズ・コーポレーションの傘下にある新聞社をそれぞれ訪問する予定だ。

アクセル・シュプリンガー社はヨーロッパを代表するマルチメディア企業で、230以上の新聞・雑誌を発行し、80以上のオンライン情報サービスを行っている。代表的な紙面はタブロイド紙BILDやDIE WELTなどだ。昨今は特に、オンラインビジネスに力を入れ、世界的にも最も注目を集めている新聞社のうちの一社だ。

2012年のグループ全体の売り上げは33.1億ユーロ、利益は3.47億ユーロに達する。2012年度の事業部門別の売り上げは、国内新聞(34%)、雑誌(14%)、国際新聞印刷(13%)、デジタル(35%)、その他サービス(4%)と多岐にわたる。他の新聞社と大きく違う点は、最新のデジタル部門の収入が総収入の3割以上を占め、広告収入においてもグループの広告収入の5割以上をデジタル広告が占めていることだ。

一方、英国の新聞発行社はNews Corp UK & Ireland Ltd（略称：News UK、旧社名はNews International）だ。News UKは米国のウォールストリート・ジャーナルなども発行する世界のメディア王、ルパード・マードック氏率いるニューズ・コーポレーションの英国の子会社だ。News UKはタイムズ(発行部数約44万部)、サンデー・タイムズ(発行部数約134万部)を発行するTimes Newspapers Ltd 、ザ・サン(世界最大の英語紙、発行部数約340万部)を発行するNews Group Newspapers Ltd (News of the Worldも発行していたが電話盗聴事件のため2011年に廃刊))などの子会社を持つ。このうちの一社を訪問する予定で現在交渉中だ。また、両社のウェブサイト(電子版)は2010年7月から有料サービスに移行している。

THE TIMES

THE Sun

THE SUNDAY TIMES

News UKが発行する新聞のタイトル

なお、親会社のニューズ・コーポレーションは先ごろ、出版部門と娯楽部門に2分割することを明らかにした。

＜訪問予定のデジタル印刷工場2社＞

今回のツアーで視察する予定の2印刷工場は独アクセル・シュプリンガー・シュパンダウ印刷工場、英ではSTROMA社だ。2社に共通するのはいずれの工場もデジタル印刷工場であるという点だ。方式の違うデジタル印刷の最前線をつぶさに見学する。

アクセル・シュプリンガーはimprinting（追

加印刷）のシステムを国内全工場の輪転機に展開しようとしている。見学するシュパンダウ工場はアクセル・シュプリンガーの印刷工場3社のうちの一つで、330人の従業員によって、日刊紙9紙、週刊紙2紙、その他商業印刷が行われている。同工場の印刷はオフセット印刷とデジタル印刷のハイブリッド印刷だ。マンローランドのCOLORMANオフセット輪転機に、コダックのPROSPER S30の追加印刷ヘッドが組み込まれている。当然、印刷速度は輪転機の最高速度に追随する。この追加印刷は読者向けのキャンペーン、利用チケット発行などのほか、編集の最新ニュースの記事差し替えなどにも利用される。

もう1社が英ロンドンのSTROMA社だ。同社は01年デジタル印刷サービスを提供するために設立された。もともとは書籍の印刷会社だったようだが、デジタル印刷を得意とするところから、新聞の印刷にも進出した。現在は、ニューヨーク・タイムズ、ウォールストリート・ジャーナル、オーストラリアン、シドニー・ヘラルドなどの海外紙多数の印刷を受託している。ここで使用されているのがフルカラーのデジタル新聞印刷機、日本のキヤノンの子会社オセのJetStream 1000だ。

シュパンダウ工場

CHINA PRINT 2013 視察記

有限会社メディアテクノス代表取締役　井上秋男（JAGAT客員研究員）

アジア最大級の印刷総合機材展「CHINA PRINT 2013」は、5月14日～18日までの5日間、北京で４年ぶりに開かれた。PM2.5や鳥インフルエンザ、中国経済の景況感悪化などの影響が懸念されたが、出展社、来場者とも前回を大きく上回り、GDPと同様世界第二位の展示会に躍進した。本稿では紙幅の関連で「開催状況」「全体トレンド&トピックス」「新聞印刷の出展状況」の三つにフォーカスしてレポートしたい。

■開催状況

正式名称は「第8届北京国際印刷技術展覧会CHINA PRINT 2013」、主催者は中国印刷及び設備器材工業協会（PEIAC）、メインテーマは「環境対応、効率化、デジタル化」、開催場所は北京首国際都空港近くの「中国国際展覧センター新館（NCIEC）」の全19ホールを使用、出展面積は16万㎡で前回よりも60%増加した。出展社は世界28の国と地域から1326社（前回よりも4%増）が、最新のプリプレス、印刷、後加工、資機材を一堂に紹介した。なお、来場者は5日間合計で前回よりも13%アップし183,809人となった。

■全体トレンド&トピックス

❶盛況空前

閉幕後、主要ベンダーから受注・契約内容の発表が相次ぎ「盛況空前」と総括された。背景として、中国印刷市場拡大、デジタル印刷の本格展開、環境対応の加速化などが挙げられている。なお、PEIACは2011年の中国印

刷市場規模は6280億元(9兆4200億円)で前年比9%増の安定成長、印刷会社は10万6400社、工場従業員数は約466万人と発表している。

❷主要ベンダー勢揃い

わが国はじめ欧米、中国の主要ベンダーがdrupa2012後初めて勢揃いし、新製品や新ソリューションを広いブースに出展した。先進国では経済成長の伸び悩みにより印刷需要が低下したことで、高成長をキープしている中国印刷市場での売上拡大を目指し全面展開した。また、来年4月にロンドンで開催される世界四大印刷総合機材展「IPEX2014」には、Heidelberg、HP、コダック、キヤノン、小森コーポレーション、ゼロックス、リコーなど不参加社が多く、CHINA PRINT 2013に勢揃いする要因にもなった。

❸デジタル印刷機の普及拡大へ

drupa2012で示されたデジタル印刷の大きな流れは中国市場にも押し寄せ、わが国・欧米の主要ベンダーからトナー・インクジェット(IJ)デジタル印刷機が多数紹介され賑わった。HPは Indigo10000によるB2サイズ印刷をアジアで初めて実演し、幅広い活用と導入実績を紹介した。富士ゼロックスはコンパクト連続紙IJデジタル印刷機を世界で初めて出展し、「商業、新聞、書籍」などの多彩な印刷を紹介した。方正電子は「モノクロ、フルカラー、ラベル、組込式」IJデジタル印刷機と統合ワークフローシステムを実演し注目を集めた。KBAは2月のHunkeler Innovation days2013で新聞印刷を実演したRotaJET76をパネルとビデオで紹介。天津長荣は中国初の枚葉IJデジタル印刷機を出展し話題となった。キヤノン、コニカミノルタ、リコー、エプソンなどは新製品、新技術や各種印刷サンプルを出展し、わが国の高度なデジタル印刷技術パワーを披露した。

❹オフセット印刷機の効率化と付加価値追求

デジタル印刷の普及拡大に対抗して、主要ベンダーから高品質、高生産性を維持しながら「速乾印刷、版交換時間短縮、大判、薄紙対応」などの新ソリューションを紹介した。わが国からは、小森コーポレーション、リョービ、三菱重工印刷紙工機械が最新機器を実演し多数来場した。また、Heidelberg、KBA、manrolandの欧州御三家も最新機器による高速・高生産性や運用容易化などを紹介した。地元中国からは、上海電気グループ(アキヤマ、GOSS)、北人集団、大族冠华、威海濱田印刷機械など多数出展し、商業、出版、包装印刷を実演した。

方正電子のブース

❺CTP,ワークフローの進化発展

中国印刷産業では、今回のメインテーマの「環境対応、効率化」が重要な取り組み課題となり、CTPやワークフロー導入が加速化している。富士フイルムは「サーマルCTP、プレート、自動現像機、廃液削減装置、統合ワークフロー」など一連のトータルソリューションを紹介し好評となった。アグフア、コダック及び多くの中国企業からも最新のCTP装置やプレート、ワークフローの出展が相次ぎ進化発展が伺えた。

❻パッケージ、ラベル印刷花盛り

中国は、世界有数の生産輸出国と消費国の二つの側面を持っているため、印刷市場では、パッケージとラベル印刷合わせ約40%の構成比を誇っている。会場ではオフセット、デジタル、グラビア印刷機による実演が数多く行われ、熱心な視察、商談が見受けられた。最近の傾向として中国でもパッケージ・ラベル

分野の「多品種・小ロット・バリアブル・セキュリティー」化が進み、デジタル印刷での取り組みが活発化している。HP、方正電子、エプソンはじめ各社から最新のソリューションの紹介や実演が増加した。

❼後加工機ソリューションの高度化

デジタル印刷の普及拡大にともない、後加工も従来のカット、折り、筋入れ、製本などの単独オフライン工程から統合インライン工程へ取り組みが進展している。大手ベンダーのホリゾンインターナショナルは、HUNKELER社と連携して「フレキシブルバインディングシステム」を出展し、オフセット/デジタル印刷に対応した無線綴じ製本ラインを実演し注目を集めた。ミュラーマルティーニ社は「バインディングシステム」を出展し、KBAデジタル印刷機RotaJET76で印刷されたロール紙からの一連の製本作業を実演した。中国企業からは、パッケージ印刷向け後加工機が多数出展され賑わった。

❽インク、資材の環境対応本格化

開催テーマにあるようにインク、資材の「環境対応」が本格化している。東洋インキ、DIC、サカタインクスの現地企業や中国系企業から環境調和、高濃度、UVインクなどが印刷サンプルとともに紹介された。資材では東レから水なしプレート、用紙ベンダーから各種印刷用紙やデジタル印刷用紙などが展示され環境対応や品質向上をPRした。

■新聞印刷の出展状況

中国は世界有数の新聞王国として政府支援により、タイトルや発行部数、売上高が順調に増加している。新聞印刷市場は2011年では約9000億円と全体の10%、第4位となっている。しかし、最近はネット拡大や若年層の新聞離れにより成長は鈍化し、新聞社、新聞印刷会社とも厳しい環境が到来している。このため都市部では不動産事業や地方では鉱山開発など事業多角化による収益向上に取り組んでいる。また、印刷部門では子会社化、印刷の委託受託や商業印刷への進出などにより経費削減と収益向上を目指している。このため新聞オフセット輪転機の新規導入は減少し、CHINA PRINT 2013では中国新聞印刷市場でシェアの大きいmanroland、KBAなどの主要ベンダーからの新聞印刷実演や実機展示はなかった。唯一、上海電気グループのGoss Internationalが、新製品「Goss Magnum Compact」を世界で初めて実機出展し話題となった。2×1方式で全自動版交換の標準装備による生産性向上、高さは2.2mのコンパクト化、4HIインキング装置による品質向上、3分割によるメンテの容易化を実現した。また、最大印刷速度5万部/時により500部の少量生産から25万部の長時間生産や新聞・書籍・準商業印刷などの多様化を紹介した。三菱重工紙工印刷機械は、新聞オフセット輪転機DIAMONDシリーズをパネル・ビデオで紹介した。

新製品「Goss Magnum Compact」

以上、「空気・食事・わが国との微妙な関係」に留意しながら、世界第二位の印刷機材展に躍り出た「CHINA PRINT 2013」をかけ足で視察した。2011年に広州東莞の姉妹展PRINT CHINAや上海のAll in Print Chinaに比べ規模は拡大したが、中国人の大好きな超派手な開会式やセレモニーもなく、各ブースも全体的に静かな展示会となった。中国の印刷産業も経済と同じく、「高成長から安定成長」「量から質」「アナログからデジタル」に向けて転換期が到来しつつあると感じた。

新局長に就任して

技術伝承に尽くす

京都新聞印刷　取締役印刷局長
杉本　英和

京都御所から300mも歩けば京都新聞本社にたどり着く。本社の東窓から京都の伝統行事「五山送り火」の『大』の字が東山に見える。もう少し北側後方へ目を向けると、世界遺産の延暦寺が建つ比叡山を望むことができる。その他京都には「古都京都の文化財」として清水寺をはじめ金閣寺、東寺、上賀茂神社、下鴨神社など、寺社仏閣の数多くが世界遺産として登録されている。

伝統的な文化や建築物、歴史的な場所から雅やかな世界を幻想する人もいるだろう。しかし、「京都人」となると、他人とは独特の距離感を保ち、「本音を言わない」と揶揄される。私の屈折した歴史観から言うと、幾多の兵火に見舞われた「応仁の乱」からではないだろうか。あくまでも俗説だが、庶民が本音の会話を避けたのは、戦火で荒廃した京都で生き残る知恵ではなかったかと想像する。

＊　＊　＊

37年前、この様な十分過ぎる歴史と文化が身近にありながら、全く無縁の現実が訪れる。

私は昭和51年（1976年）に入社し、印刷輪転部門に配属された。当時は5セットの凸版輪転機を保有していた。「きつい、危険、きたない」の典型的な「3K」に、もうひとつ『くらい』を加えた4Kの輪転工場で社会人の一歩を踏み出した。

少々、下品な話しになるがご了承願いたい。

ある日、メンテナンス作業を終えて、先輩からこう言われた。「今日のローラー調整、覚えときや。お前も痔と水虫になったら一人前や」。この励ましとも取れない言葉を現実として受け入れる日がやって来た。入社して20数年、「一人前」になってしまった。もちろん仕事が「一人前」ではなく病？のことだ。輪転現場は安全上、つま先に金属の入った通気性の悪い安全靴を使用する。ローラー調整や折部のメンテは、長時間しゃがみ込んだ姿勢で作業をする。鉛版の運搬や重量物の取り外しも行う。これに不規則なローテ勤務、寝不足を繰り返すと立派な「一人前」になった。

一方、本来の仕事は今でも「一人前」の自覚はないが、多くの先輩達から技術を学んだ。工具の持ち方から印刷技術に至るまで「技術・技能の伝承」をして頂いた。

＊　＊　＊

印刷局長に就任して、新入社員の教育・研修、中堅の人材育成、「技術・技能の伝承」が最重要課題と考えている。

現在は安全作業を中心に作業手順はマニュアル化されており、メンテナンスやトラブル、交換部品履歴なども全てデータ化し、運用されている。紙面品質も数値管理しており、勘を頼りにすることも少なくなり、以前に比べて技術を学ぶ環境は格段に良くなった。しかし、残念ながら「技術・技能の伝承」は教える側と学ぶ側の気持ちが一致していないとなかなか結果は出ない。それは、その人の最も輝かしい経験と成果を受け継ぐものであり、人間力そのものを継承するからだろう。技術・技能が受け継がれる環境作りに力を尽くしたい。

今夏も「日本三大祭」である祇園祭が行われる。平安時代に疫病が流行した際、災厄祈願の行事が祭りの始まりとされている。冒頭に述べた「応仁の乱」で祭りは一旦途絶えるが、見事に再興された。伝統行事と私達の技術・技能とは異質なものだが、「本音を言わない京都人」も後世に伝え残す素晴らしい人間力があったのだろう。

発想転換し業務改革

日本経済新聞社　製作局長
宮本　寿昭

入社した1983年は、日本経済新聞社の地方分散委託印刷が本格的にスタートした年だった。生まれ故郷が先鞭になったことを印象深く覚えている。その後、委託先は全国に広がり、現在は14工場に印刷をお願いしている。30年前、委託先の皆さんと接することになるとは夢にも思っていなかった。

会社に30年もいると、いろいろなものが変わった。技術進歩などに対応してきたわけだが、ここ数年の変化はかなり事情が変わってきている。

＊　＊　＊

日経は今、上流の新聞制作系と業務系のシステムを一斉更新する「NEOプロジェクト」に取り組んでいる。現行システムが多様な機能を盛り込んだつくり込みタイプなのに対し、新システムは分かりやすくいうとパッケージ商品タイプ。機能は制約されるので、それに合わせて仕事の仕方を変えることになる。どう変えるのか、製作部門も発想の転換を求められている。

新聞産業が成長していた時代には、システム開発に投じられる資金もそれなりにあった。ところが今では、限られた投資額のなかで最大限の効果を引き出すことが至上命題だ。しかも採用の抑制で人員は減っている。多くの業務を、機能面で制約のあるシステムで処理しなければいけないのだから、個々の能力を伸ばさざるをえない。もちろん自分自身も成長し続ける必要がある。

変化は上流部門だけでなく、下流部門にも及んでいる。ほんの数年前まで、部数拡大へ向け新工場を建てたりカラー増強工事を進めたりしていたのに、今では工場再編や設備の延命が直面する最大の課題になっている。

輪転機の更新もままならず、投資案件を局内でチェックする会議に上がってくるのは延命案件ばかり。それさえ先延ばしできないか再検討することもある。メンテナンス費用を積み上げていくと多額になり、ここでも発想や仕事の仕方を変えることにした。部品交換作業など内製化できるものは内製化して経費削減に努めている。

＊　＊　＊

若手がほとんど入らず、中堅以上ばかりになった技術陣の活力が衰えていないことは心強く思っている。紙面の高精細化、高濃度インキの導入、現像処理がいらない刷版の採用など、技術的課題は数多い。紙面品質の向上とコスト削減へ向け、それぞれの担当者がメーカーの皆さんと打ち合わせを重ね、着実に実現へと近づいている。メーカーの皆さんが苦笑するほど多くの要望をぶつけるケースもあるようだが、新しい技術を定着させる苦労と、ご容赦願いたい。

製作部門は自由闊達な気風をしっかりと引き継いできた。それぞれの立場から自由な発想で発言できる。成長を前提にした投資が少なくなり、萎縮してもおかしくない環境の中でも前向きな姿勢が失われてないのは、自由闊達な気風ゆえと思う。これからも、この気風を大切に守りながら、大いに議論をして、新しい発想で製作部門の将来を切り拓いていきたい。

＊　＊　＊

最後に、今年はローテーションのめぐり合わせで、日本新聞協会技術委員会の委員長に就きました。ある時は日経製作局長、別の時には技術委員長として皆様とお会いすることになります。立場が変わると言うことも変るのか、それともあくまで同じ人間なのか。多少の戸惑いはありますが、よろしくお願いいたします。

無常迅速

福島民報社　印刷局長

宍戸　篤

私が入社した昭和56年は、折しもわが社がカラー印刷を開始した年でした。その4年前の52年に、現在の本社社屋が完成し、地下の印刷工場でオフセット印刷が始まり、苦労を重ねながら機械もようやく落ち着いた状態のころでした。カラー化で新たな苦労が始まり、新入社員の私にとっても忘れられない日々でした。

当時の輪転機は、刷版1L1W版2枚を縦方向に装着するタイプで、色見当合わせするのにかなりの時間がかかりました。版咥えの動きが悪く、罫線1本分をマイナスドライバー・鉛玉で叩いて手動調整するのですから、大変な作業です。色見本もお粗末なものしかなく、色調の苦情も頻繁にありました。巻取紙装着、ペースター仕立て、ブランケット洗浄等がすべて手作業で、まさに肉体労働、職人技の世界でした。

そのおかげで、基本的な機械構造・制御を短期間に身をもって習得できた時代だったと思います。現在、使用している機械は進化して、自動化や標準化されて作業環境は格段に良くなっていますが、一方で技や体力を奪われたようにも感じます。

＊　＊　＊

現在の印刷センターは、平成7年のふくしま国体開催時に合わせて完成、稼働しました。18年にタワー輪転機を増設して32頁16個面カラー2セットと32頁12個面カラー1セット、計3セット体制で運用して、今年で満18年になります。電気制御部品などの劣化対策で延命工事を実施し、現在も順調に稼働しています。

東日本大震災発生時にも、生産機械には大きな損害が無く新聞を発行できました。震災発生時には冷却水配管が破断してしまい、インキ冷却が必要なキーレス輪転機が使用不能となったため、タワー輪転機のみの印刷で減頁対応しました。翌々日の配管修理作業中に東京電力福島第一原発事故が発生し、修理業者が東京本社の指示で作業を中止して退避したので、復旧に時間かかってしまいました。

震災と原発事故で多くの県民が県内外に避難したので、発行部数は震災前の77%程度に減ってしまいました。2年3カ月が経過した現在は約83%となっています。6月1、2日に福島市で「東北六魂祭　2013　福島」が開催され、2日間で県内外から約25万人（主催者発表）が集いました。また、会津地方ではNHK「八重の桜」で盛り上がっていて、鶴ヶ城に行列ができるほどの人が集まる日もあります。このようなイベントで、風評被害などが徐々に解消されて、震災前の状態に少しでも近づくことを願っております。

＊　＊　＊

4月1日付で印刷局長を拝命して、2カ月になります。入社以来の慣れ親しんだ職場ですが、普通に新聞を印刷して発行することが、いかに難しいかを知り過ぎています。普通が当たり前で、苦情や叱責は度々ですが褒められることは、ほとんどない職場です。

常に機械の状態を把握して大事になる前に手当てをしていますが、故障は突然に発生するものです。今までは復旧に専念できましたが、立場が変わり不慣れな社内連絡や調整も必要になり、苦労しています。

品質の高い紙面を印刷するには、輪転機の整備が一番大切です。気心の知れた職場の仲間と懸命に頑張っていますが、人間も機械も老朽化が進んでいるので、若返りを計らなければなりません。難しい課題ですが、新聞の安定発行には必要不可欠なことであり、着実に取り組んでいかなければないと決意を新たにしています。

「用語辞典」が相棒の日々

山形新聞社　システム局長
松田　隆仁

長年、お世話になった整理部から同じフロアを北に30歩ほどのシステム局に異動した。その1週間後に「最新標準　パソコン用語辞典」なる厚さ4㌢もある本を1800円（税別）で購入することになった。様々な会議のレジュメに書かれている片仮名や、報告に来てくれる部員たちが使う用語が、分からなかったのである。

＊　＊　＊

前任の整理部には新人研修期間の半年と30代終盤から40代にかけて支社長（といっても記者は1人で、何でもやった）として赴任した天童支社の4年間を除き、本当に長く置いていただいた。入社したころはまだ鉛活字の時代で、職人の雰囲気を漂わせる活版部の先輩と2人1組で大組みをしていた。新人整理記者のアバウトなレイアウトを何となく解釈してくれて、いつの間にか組み上げてしまう手品師のようなベテランも。懐かしい思い出となっている。

1979年にオフセット輪転機が導入され、カラー写真が毎日掲載されるようになった。このころから、新聞づくりの現場にコンピューターという新顔が出没するようになったと思う。84年には初代のコンピューター編集システムがスタートし、86年に鉛活字が完全に姿を消した。整理暮らしが長かっただけに、最初のシステムの座学用テキストの表紙には若いころの自分の姿があるし、2代目で取り組んだ整理記者組版の先行者として記者教育を担当した。98年の制作センター完成披露では全国から訪れるVIP担当になり、移動のバスの中でセンターの概要を説明させていただいたこともある。制作・システム系には縁があったのかもしれない。

去年の秋に、4代目となるシステム更新が終了した。CTPの導入で出力スピードが大幅にアップしたし、エコスクリーニング採用で紙面品質が向上した。100線から200線にしたカラー写真は、きめ細かな表現が可能になって鮮やかに紙面を飾っている。と、思っているのだが、現場はなかなかシビアだ。そう簡単には納得しない。今もメーカーと品質の協議を継続している。こうした「こだわり」が、美しいカラー写真を掲載しているとして高い評価を受けてきた本紙を支えてきたのだろう。良き伝統としてしっかり受け継いでいきたいと思う。

新システムへの移行から8カ月がたつが、ありがたいことに大きなトラブルもなく安定稼働が続いている。これをチャンスととらえて、今年度は災害・障害時の対応を進めることにした。メーカーにスタンドアロン組版の説明を受け、検証系システム活用も合わせて研究を始めている。何しろ、東日本大震災では制作センターが停電して紙齢を絶やす瀬戸際を経験している身だ。災害時援助協定を結んでいた新潟日報さんに、4月7日の余震の時も含め3度も輪転機を回してもらい心から感謝をしているが、自分たちの力で何ができるのか、知恵を絞っていきたい。

＊　＊　＊

「パソコン用語辞典」を何度も開き、「これってどういう意味？」を連発する日々は続いているが、悲壮感があるわけではない。紙面づくりに直接関わってきた中で蓄積してきた感覚を、こちらの仕事に生かすことはできると思う。機械を使うのは人間だ。次のシステムを担う若い人たちのマンパワーを引き出し育てる方策を考えながら、自分も成長していければと考えている。

楽事万歳

岳の湧口

デーリー東北新聞社
編集局次長兼印刷部長兼技術部長
竹ノ子　昭二

岩手県北部にそびえる折爪岳の恵みをいただくようになって20年近くになる。「お茶はおいしいし、水割りも最高」と会社の先輩に誘われて水汲みについて行ったのがきっかけだった。くせのないすっきりとした喉越しに病みつきとなり、青森県八戸市の自宅から車で1時間、2カ月に一度は通っている。

＊　＊　＊

標高852・2㍍の折爪岳中腹にある岳の湧口(だけのわっくつ)が、私が通う貴重な水汲み場である。岩手の名水20選に指定されている岳の湧口は、水量が豊富で湧き出す山の水は清浄そのもの。苔むした鶴と亀の置物があり、通い始めたころはイワナも見ることができた。春はフクジュソウにカタクリが咲き、夏はオオルリなどのさえずり、秋には黄色に色づいたギンナン、冬は静まり返り音のない銀世界といつ行っても心癒される場所だ。

一度に汲む湧き水は、焼酎を飲み終えた4㍑のペットボトル40-50本、15㍑のポリタンク4個と合計200㍑を超えるため必ず二人で出かけている。最初のころはこんなに多くなかったが、お茶や飲料水のほかご飯、みそ汁にも使うようになり量が増えた。水を汲むのはもっぱら妻や子供たちで、重いペットボトルを水汲み場から車まで運び上げるのが私の役目だ。

車を止めている場所から湧口までは30㍍ぐらいだが、急な下り坂になっている。逆に湧口からは急な登りとなるため、運び上げるのは一苦労である。背負いかごにペットボトル4本を入れ、両手にも2本ずつ提げて坂道を登るが、運び終えるころには汗が噴き出す。一息入れ、両手ですくって飲む湧き水のうまいこと、うまいこと。

うまいといえば帰りに必ず食べるさるなしソフトクリームもなかなかの味だ。軽米町特産のサルナシを練りこんだアイスは、甘みを抑えた大人の味といったところか。一汗かいた後だけに口の中も気分もさわやかになる。250円のさるなしアイスは、いつの間にか水汲みの楽しみの一つになってしまった。

＊　＊　＊

雪国青森県内には、お隣の岩手県同様名水がたくさんある。八戸市内の水道水は、四つの水源のうち二つが湧き水だ。我が家の水道水は蟹沢浄水場から配水されており、湧き水のため夏は冷たくおいしい。それなのになぜガソリン代をかけ、汗だくになって岳の湧き水を汲みに行くのか。習慣といえばそれまでだが、岳の湧口には人を引き寄せる不思議な力があるようだ。

うっそうとした木々に覆われた湧口は、岳の中腹にあるため夏は足を踏み入れた途端自然の冷気に包まれる。こんこんと湧き出す自然水、名前のとおりまさに「わっくつ」そのものだ。大量の湧き水は、激しい瀬音を立てて急な沢を流れ下っていく。岳とはいえこれだけ大量の水を一か所に集め、一年中流し続けるなんて自然のすごさに感心させられる。湧口近くには祠が建っており、地元の人たちが自然を敬い、湧口を大切にしてきたことがうかがえる。私も神様に手を合わせ、自然に感謝するとともに家族の健康を祈願している。

＊　＊　＊

暑くなると汲んできた湧き水の減り方が激しくなる。夏の水汲みは流す汗も多いが、水を汲みあげる体力があるのかを確かめるいい機会でもある。さるなしアイスも食べたくなったし、今度の水汲みはいつにしようか。

日独の高い技術融合

弊社の親会社であるボッシュ・レックスロス社の本社は、ドイツの空の玄関と言われるフランクフルト空港から東へ約80kmのところにあり、世界36カ国に子会社、80カ国に販売ネットワークを持つグローバル企業として、油圧機器をメインに電動サーボドライブ、リニアガイドシステムなどを開発・製造・販売しております。

日本国内においては、グローバル企業としての強みを生かしたサービス網を駆使し、建設機械、産業機械、印刷機械、工作機械、半導体装置などの多岐に渡るアプリケーションに対し、油圧制御システム、省エネシステム、新世代サーボドライブシステムなどをご提案・供給させて頂いております。近年のグローバル化に伴い、日本国内においても各種機械における更なる安全機能の追加要求が増えてきており、弊社のご提供するドライブシステム「IndraDriveシリーズ」に搭載されている安全機能「SAFETY ON BOARD」をご採用頂く事により、より安全性が高くSafety機能が作動した際、リアクションタイム<2msまで短縮する事が可能です。また、次世代モーションコントローラ「IndraMotionシリーズ」では、弊社が今まで蓄積してきた技術ノウハウを盛込んだ「テクニカルファンクションブロック」をご利用頂くことにより、モーション設計時間の短縮が可能となります。

私たちボッシュ・レックスロスは幅広い製品群及びアプリケーション技術ノウハウ（日独の高い技術融合）を提供することで、お客様の開発・設計及び生産から販売、アフターサービスに至るまで要求ニーズに対し柔軟に対応致しております。

Rexroth Bosch Group

先端技術とソリューションで、お客様の継続的なビジネス変革をサポート

新聞各社およびパートナー各社の皆様には、長年にわたるご愛顧をいただいておりますことをこの場を借りてお礼申し上げます。

コンピューティングは今、新たな時代を迎えています。ITはより身近になり、増え続ける大量のデジタル・データからの洞察、迅速な意思決定を可能にするシステムや技術が求められています。IBMは、新たなテクノロジーが、さまざまな事業領域に大きな変革をもたらしており、高付加価値製品やサービスを通じたビジネスモデル変革の可能性があると考えております。

このたびIBMは、ビジネスニーズに即応し、継続的なビジネス変革を実現するための新コンピューティング・モデル「Software Defined Environment（SDE）」を発表しました。IT資源やデータを一元的に管理し、処理の特性に応じ、ポリシー・ベースで柔軟かつ自律的に資源配備を行うことで、迅速にビジネス機会に対応するITインフラの構築を実現できます。

IBMは今後も、お客様の競争力強化に貢献する世界水準のソリューションを提供してまいります。デジタル化の進んだ市場環境に即した顧客中心の商取引を 支援するスマーター・コマース、データをもとにリスク最小化や的確な意志決定を支援するビジネス・アナリティクス、変化するビジネス環境への迅速、柔軟な対応を支援するクラウド・コンピューティング、東北地方の復興を含め、行政や企業が進める地域経済活性化を支援するスマーター・シティーなどに注力していきます。

日本アイ・ビー・エム株式会社

リニア駆動で仕分け低騒音

弊社は機械商社として動伝部品、設備装置、産業資財を販売する技術商社です。新聞業界へは姉妹会社の椿本チエインと一体となり、紙庫、給紙設備及び発送仕分設備の機器を納入しています。

巻取紙給紙設備としては、つばき給紙AGVは新聞製作工場において多くの納入実績を誇る巻取紙無人搬送台車です。特に「AGV MarkⅡ」は誘導方式を磁気テープ方式に変更して新工場設置、既設工場更新設置でも高度な巻取紙の給紙システムを実現します。

発送仕分設備

①最大200束／分の高速大量仕分能力を有するリニア駆動式仕分機「つばきリニソート」リニアモータ、アルミレールの採用により低騒音化を実現しています。モータの分散制御によりシステム稼働率が高くメンテナンスフリーで運用が可能となっています。②ベルトコンベヤ方式の仕分機「クイックソート」シンプルな構造にもかかわらず120束／分の仕分けを確実に行う小型で高能力な仕分機です。上記2種類の仕分設備を新聞工場の必要能力によって選定し提案をしています。

弊社は今後とも椿本チエインと一致協力し新しい技術の納入、新製品の開発を行い新聞業界の発展に向け微力ながら協力していきたいと願っております。今後ともかわらぬご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

椿本興業株式會社

幅広い分野での開発経験を活かして

NECエンジニアリングはNECグループの一員として、幅広い分野での開発経験を事業の基盤としています。

●ICTソリューションの提供

ITとNW統合ソリューションでは企業と企業、国と国、あらゆるものをつなぐインターネット・コミュニケーションを創造します。

●情報端末・通信機器の開発

携帯電話や携帯電話基地局の開発・設計、暮らしに欠かせないコミュニケーションツールです。また、音声会議およびテレビ会議システムの構築により、人の移動にともなう時間とエネルギー削減によりエコロジーに貢献しています。

●デバイス・モジュールの開発

LSIの開発・設計、目に触れることはありませんが、あらゆる電子機器で使われています。宇宙関連機器開発での精密なハードウェア設計と構造設計では地球規模での技術発展、そして環境保全にも貢献します。また衛星基地局装置のハードウェアおよびシステム設計では確実に、迅速に、安全に、世界をカバーする情報ネットワークを形成します。

●新聞製作関連機器の開発

新聞紙面製作になくてはならない製品群です。

NECエンジニアリングは、長年の開発業務で培った技術力を駆使し、お客様の様々なニーズの実現に貢献してまいります。

NEC エンジニアリング㈱

第39回定時総会開く

第39回定時総会を5月24日（金）午後4時から、プレスセンター9階会議室で開いた。宮本寿昭新聞協会技術委員長（日経）、佐塚正樹同編集制作部長、仙石伸也同主管を来賓に迎え、会員社31社からは40名の方々が出席した。

冒頭、芝則之会長が挨拶、エベレスト登頂の三浦雄一郎氏と同じ年で、懇話会会長10年になるが引き続き務めることになったとし、今年度の課題を述べた。次回JANPSについては、春の会員社アンケートの結果をふまえ「2015年東京ビッグサイト開催が多数意見であり、それに向けビッグサイト側とコンタクトをとっている。それがかなわなければ4年後の2016年開催も止むを得ないというのが大勢だ」との基本姿勢を示した。また「秋のCONPT-TOURに視察団を派遣するが、今回は上流・下流ともデジタルが目玉で多くの参加者を期待している。大幅な円安で費用をどの程度に抑えるかが課題」と述べた。

宮本委員長は、整理記者であった自身のCTS体験を紹介し、「部数減、消費税上げのなか、最少の投資で最大の効果を要求されている新聞社製作部門は、皆さんに無理を言っているが、よろしくお願いする」と挨拶。佐塚部長からは、日頃の技術協力に対する感謝の言葉のほか、新聞技術情報誌の廃刊に理解を求める発言があった。

総会は芝会長を議長に選出した後、24年度収支報告書が問題なしとの島光一会計監事の報告があり、総額2,037万6,000円（前年度2,446万500円）の25年度予算案を拍手で承認した。さらに25年度役員体制を前期通り継承する議案を了承、CONPT-TOURを含む事業計画案も原案通り了承した。

総会後、午後5時から懇親会を開き藤間修一副会長の発声で乾杯の後、歓談に入った。1時間半にわたる懇親会は、上坂副会長の中締めでお開きとなった。　**（事務局）**

CONPT 日誌

４月11日（木）クラブ委員会（出席９名）
　16日（火）企画委員会（出席11名）
　18日（木）広報委員会（出席７名）
　23日（火）評議員会（出席８名）
５月24日（金）第39回定時総会並びに懇親会（於日本記者クラブ大会議室並びに宴会場、出席31社40名、来賓３名）
６月11日（火）クラブ委員会（出席７名）
　13日（木）企画委員会（出席９名）
　18日（火）広報委員会（出席８名）
　20日（木）評議員会（出席８名）
　21日（金）～22日（土）
　　第37回国内研修会～高知新聞まほろばセンター～（22名参加）

会員消息

■担当者変更

＊㈱ゴスグラフィックシステムズジャパン（４月25日付）
〔新〕中村　英之（営業部部長）
〔旧〕小林　忠明（営業部次長）

■所在地変更

＊東洋インキ㈱（５月７日付）
（〒104-8378）
中央区京橋2丁目７－９京橋イーストビル
電話番号は変更ありません。

新着資料

（国内）

＊日本新聞協会“NSK経営リポート”冬号～春号、“新聞技術” No.222～223、“日本の新聞2013”
＊富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ“FGひろば” Vol.154～155
＊日本ＩＢＭ“無限大” No.132
＊三菱重工業“三菱重工グラフ” 170～171

（海外）

＊WAN-IFRA “IFRA Magazine” １～６月号